

# ペシヤワール会報

No.49



ペシヤワール会 〒810 福岡市中央区大名  
 一丁目一〇一・二五 上村第二ビル三〇七号  
 電話・FAX 〇九二(七三二)二三三七二

- 小さくとも美しく、永続的な活動を ..... ハンフリー・ピーター
- ハンセン病の真実と偽り ..... 中村 哲
- 活動の着実な広がり期待を寄せて ..... 村上 優
- 着実に育ってきた活動 ..... 服部亮市
- 「現地主義」を支えるために ..... 八木 巖
- 現地の励みとなる活動を ..... 蔵所麻里子
- やっと相手のことを思えるようになった ..... 蔵所麻里子
- 山を越え川を渡ってフィールドワーク(一) ..... 藤田千代子

タリブ・ナジ \*表紙絵 甲斐大策

ペシヤワール会は1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています。

ペシヤワール会 インターネット

ホームページ <http://www1.meshnet.or.jp/~peshawar/>  
 電子メール [peshawar@mx.meshnet.or.jp](mailto:peshawar@mx.meshnet.or.jp)

# 小さくとも美しく、永続的な活動を

## パートナーシップのさらなる発展のために

ペシャワール会の一員として、私たちは途中で活動を止め、この貧しい人々の苦しみを増すようなことがあってはならないと思います。小さくとも美しく、永続的な活動を目指そうではありませんか。

PLS (ペシャワール・レプロシー・サービス) 責任者 **ハンフリー・ピーター**

さる七月二十一日、九六年度ペシャワール会総会が開かれました。今年の総会にはPLSの責任者であるハンフリー氏をお招きし、新病院建設をアピールして頂きました。以下はその講演の内容を収録したものです。

\*

先ず私の話を始める前に、ペシャワール会の皆さんにお礼の言葉を申し上げたいと思います。今回日本にご招待いただき、ペシャワール会の پاکستان・ペシャワールにおける活動の報告をする機会をくださいましたこと、そして本日、お時間を割いて私の話を聞きに来てくださったことに對し、感謝申し上げます。

### パキスタンの状況

パキスタンのことを簡単にお話いたしますと、人口一億一千四百万人で、識字率は二六パーセント。最近の国連開発計画の報告(一九九六年)によりますと、パキスタン一人につき医療・教育に使うお金は一〇米ドルで、ちなみにマレーシアでは一五〇ドル、韓国は一六〇ドルとのことでした。極貧の生活を送っている人が三千五百万人、医療施設へのアクセスを全く持たない人が六千万人、安全な飲料水なしに暮らしているのは二千八百万人、そして基本的な衛生設備が整っていないところで暮らしている人が八千九百万人です。ワールド・アルマナック(「世界年鑑」)によりますと、千六百十九人の患者につき一床、二千二百四十二人につき一人の医者です。このような状況の中、ペシャワール会が、らいの領域で医療計画

を開始したことは、大変に勇気のいることであつたと言えるでしょう。

### 中村先生との出会いとPLSの発足

中村先生に紹介されたのは、一九八六年九月、メンタルヘルスセンター(MHC)副所長に就任したときのことでした。MHCは知能ならびに身体に障害をもった患者とくに子供達の訓練・リハビリ施設です。一九八九年、MHCの所長職を引き継いだ時、中村先生に癲癇てんかんの患者を診てもらえないか、とお願いしました。先生はこれを快く引き受けてくださり、ボランティアの医療顧問としてお手伝いをしてくださるようになりました。間もなく中村先生はさらに癲癇患者のケアを強化するため、女性医師を育成されたのですが、この女



総会で報告するハンフリー氏



病院の中庭で談笑する患者さん

性医師が私の妻であります。わたしは一日に五つの医療機関——カイバル病院、レディー・リーディング病院、ミツシヨン病院、JAMSそしてMHC——を回っておられる中村先生の熱意と働きに驚嘆させられました。

一九九四年九月にペシャワール会の村上事務局長と沢田さんが、中村先生と一緒に公式に私を訪ねて来られ、私と妻と一緒にMHCと協力してらいコントロール計画を合同で始めることが出来なにか話し合いました。しかし、この話はそれ以上に発展しませんでした。

それから二カ月後の十一月十一日の夜十時半、

中村先生から電話があり、翌朝ペシャワール市内のホテルに来てくれなにかと言われました。翌日私たちは再びらいコントロール計画について話し合いを始めていました。話をしていくうち、(ミツシヨン病院のらい病棟から独立して——編集部

注)独自のNGOを設立してはどうだろう、というアイデアが浮かびました。このアイデアは私たち二人にはとても魅力的に思えましたし、ペシャワール会のメンバーの方たちもきくと、新しいNGOという考えに賛同してくれる、と思いました。この経験の中で、中村先生から正式に、新NGO設立にあたって力を貸して欲しい、と依頼を受けたのです。

それから中村先生は日本側と新NGOの設立についての話し合いに、私は法的基盤の獲得のためパキスタン政府との交渉に取りかかりました。そのためには、新しい組織の会則を書き、スタッフを見つけ、母体となる組織ならびに核となる理事会の設定、さらに銀行口座の開設をしなければなりません。昼夜を通して一生懸命にやっただけで、なんとか五日間で会則を完成し、母体組織と理事会の設立にこぎつけることができました。母体組織の名称は、ペシャワール会りハビリティーション・エクステンション・プログラム(PREP)とすることにしました。

### 幽霊屋敷から政府登録のNGOへ

福岡とペシャワールの両方で忙しく準備を進める一方、中村先生はJAMSと協力して何とか事務所と小さな病院の機能を果たすことの出来る家

を借りて来ました。先生が私にその家屋を見て欲しいと言うので一緒にいきますと、その大きく古い家はまるで幽霊屋敷のようでした。水道設備は整っていません。トイレは塞がれていて、患者数を考えると数も足りません。庭はジャングルのように木がおおい茂り、ドアや窓のいくつかは壊れていました。しかし、広さや家賃を考えると、私たちの予算内の物件でした。そしてこの家をPREPの活動拠点として、ペシャワール・レプロシー・サービス(PLS)と名付けることにしたのでした。

それから建物の改修工事を始め、一方で法的基盤の確保に努めました。中村先生、藤田看護婦、事務担当ワーカーの豊崎さんと七人の現地スタッフで、病院として機能できるように、器具や設備を持ち込み、設置しました。新採用のスタッフの面接、水道・ガス設備、台所、トイレなどの設備の改修を同時並行で進めました。電話もファックスもコピー機もありませんでした。車両が一台あっただけです(それも後で泥棒に盗まれてしまいました)。

この時期、JAMSはまるで私たちの兄のように助けてくれましたし、MHCからも助けていただきました。そして一九九四年十一月十七日、私たちは活動を開始したのです。現在、この小さな病院はそれなりに機能しています。

診療開始当時は、私の妻とJAMSのドクター達、そして中村先生で患者の診療にあたりました。診療を行う一方、私たちはパキスタン政府からNGOとしての認証を受けようと懸命に努力しま



PLS 正門

した。場合によっては二年あるいはそれ以上の時間がかかることは知っていました。ですから、同じ年の二月七日に法的認証を受けたことについて、わたしは奇跡としか言いようがありません。今日、私たちはパキスタン北西辺境州政府の社会福祉省から合法的な組織としての活動許可を得ています。また同政府の医療保健省からも活動許可を与えられています。さらに今後はパキスタン政府より、免税措置を受けたいと考えています。

なぜ、私たちはこの道を選んだのか？

ちょうど一年前、今の診療所を始める直前の頃のことですが、パキスタンの新聞にらいは終息したという記事が掲載されました。中村先生はじめ、多くの人がこの声明について、疑わしいという印象を持っていました。その疑いは間違いではありませんでした。なぜなら、それからちょうど一年の間、一九九四年十一月十四日から一九九五年十二月三十一日までに百人余りの新患を診察しましたし、北部ではもっと多くの患者がいます。なかには、アフガニスタンから国境を越えてパキスタンにやってくる患者もいたのです。

統計をざっとお話ししますと、パキスタンは面積一〇一、七四一平方キロ、人口およそ千九百万人の地域では二百人にひとりの患者がらいに罹患しているのではないかと考えられています。子供の罹患率は六パーセントで、うち二十一パーセントが変形を多発しています。変形を完治するには半年以上を要します。現在、この変形の再建手術ができる医者は中村先生しかいません。以前はらい患者用のベッドは五十床しかありませんでした。今ではそれにPLSが四十五床を加えています。

このような状況の中、貧しく置き去りにされたらい患者のコミュニティーを助け、新たな患者の発生を防ぐことは大変重要な役割を果たすようになってきています。

そこで私たちは北部地域と、アフガニスタンとの国境近くに診療基地を設立したのでした。

小さくとも美しく

PLSを始めた当初は、日本人ワーカーを含め十人のスタッフしかいませんでしたが、現在では、三十四人のスタッフを抱える四十五床の病院になりました。この一年の間に、二万人の患者を診察し、六百人の患者が入院しました。また以前より機能を高めたサンダルワークショップでは、らいで変形を起こした患者のための特別な靴を生産しています。また、法的な基盤も獲得しました。この一年間にPLSを訪れた医学校やほかの医療機関の学生の数はおよそ二百人。このことは、保健衛生の分野で私たちが認められたことの証左だと思います。私たちの活動はパキスタンとアフガニスタンの国境近くの北部地域で始まりました。また同地域にフィールド基地とフィールド診療所を設立しました。PLSのスタッフは通常の業務に加え、フィールド診療にもたずさわっています。これらの活動が全て可能になったのも、ペシャワール会の支援があったからこそです。

旧ソ連のアフガニスタン侵攻の頃は、パキスタン北西辺境州で二百余りのNGOが活動し、多くのパキスタン人を雇用していました。しかし、戦争が終結すると同時に、百八十を越えるNGOが活動を中止し、パキスタンを後にしました。そして何千人というパキスタン人が職を失いました。このような状況はすでに貧困に苦しんでいるパキスタンの人々にさらに苦痛を与えることになったのです。

ペシャワール会の一員として、私たちは途中で活

動を止め、この貧しい人々の苦しみを増すようなことがあつてはならないと思います。小さくとも美しく、永続的な活動を目指そうではありませんか。

活動を永続させるためには、永続的な施設を確保しなければなりません。先ほどお話ししましたように、現在の借家は活動開始時の一時的な基地であり、診療所としては適切な建物ではありません。診療所としてきちんと設備された場所が必要なのです。そのためには、自前の建物が必要となります。

### ワールドワーク

先ほど申し上げたように、PLSのスタッフはワールドワークにもたずさわっていますが、今よりもっと強化したワールドチームを組むことが大切です。そしてこのチームが医療スタッフに先んじてワールドに出て新患を発見し、治療の前準備をする、というふうにしたいと思います。また、らい患者とその家族は、病気だけでなく、社会的な問題を抱えています。ワールドチームが、こういった社会経済的問題もケアできれば、と考えています。

地元の人を訓練し、出身地域で働けるようにし、らい多発地域の住民に適切な衛生教育を行う、といったような適切な教育的支援を行えば、診療センターとワールドワークがさらに強化されるでしょう。そうすれば、らい予防に大いに役立つと思います。

### パートナーシップ

ペシャワール会の私たちは、ある意味で戦争を闘っていると言えるでしょう。それはつまり、無知、低い識字率、病い、貧困との戦いです。パキスタンに在る私たちはこれらの問題に直面しながら戦い、日本人々はそれを支援して下さっている。日本とパキスタンの両側から攻め、この戦いに勝利することができないのでしょうか。ともにパートナーとして力を合わせ、無知や低い識字率や病や貧困を完全に無くして行こうではありませんか。

今回私が日本に到着したとき、気温は摂氏二十七度で、皆、暑い暑いと言っていました。しかし、私がペシャワールを発った頃は現地は三十八度でした。これから数日間は、さらに温度が上がるでしょう。これは、日本からのワーカーの方達が現地で働いていく上で経験している多くの困難のほんの一例です。ワールドワークに出かける時などは、まず一日目は十四時間車に揺られ、さらに翌日五時間車に乗り、その後八〜十時間歩くか、馬の背に乗ってやとらい多発地帯に到着することができのです。それに加えて社会的・文化的困難をも乗り越えて協力してくださっている日本人ワーカーの人達には心から感謝しています。こういった熱心なワーカー達を派遣して下さっている皆さんにもお礼を申し上げたいと思います。これからもさらに私たちのパートナーシップが発展していくことを確信しています。ご静聴ありがとうございました。

表紙をめぐる小さな物語 12

### タリブ・ナジ

甲斐大策

「迷路へ誘うは麝香の灯、お前の闇へ導くは月下のジャスミンが紡ぐ香り糸、星空盡きて糸杉巨人黒々と、その足元の闇の彼方に待つは蕃薇のかんばせ……ああ、いまだ迷路のさ中……」

泥に埋まった円柱に上半身を凭せ掛けたナジは、自らのものか誰のことばか不確かな五行詩を口にしていた。かつて人々が集い、詩作を詠じ、生きる欣びを春芳の中に讃え合った、あのオレンジの果樹園は本当に在ったのか……。カーブルを目指したナジだったが、ジャラバード郊外で力盡きた。

パシュトゥンとトルクメンの血を併せもつタジクの大地主の家に育ったナジは、詩と音楽を命の糧に生きる若者だった。長毛の茶色のトルコ猫を抱いた五歳下の妹がいつも傍にいた。唄うようにクラウンを読むナジを人々は、タリブ（神学生）の愛称で呼んだものだった。

ナジが十六歳の時、政府軍は家族全てを奪った。しかしナジは、戦おうとしなかった。ナジは優し過ぎた。戦場へ向う幼な馴染みは、別れの抱擁の時、耳元でささやいた。

「おまえは詩をうたえ、それでいいんだよ、ナジ……」

痩せた犬がナジを凝視めている。五日前トル・ハムの西で拾った掌程のナンと少し前にもいざばかりの蕃薇の実をナジは差し出した。

「よく生きていたね。これも全部上げよう……」  
ナジの美しく澄んでいた青灰色の瞳が見る先は虚空にとどまり、光を失う寸前だった。

# ハンセン病の真実と偽り 今、なぜ「らい」なのか

JPLS (ペシャワール・レブロンシー・サービス) 院長  
JAMS (日本アフガン医療サービス) 顧問医師 中村 哲

最近、ペシャワール会の会員にも若い層が増え、「らい(ハンセン病)ってどんな病気?」という質問に驚くことがある。しかし、かくも完璧に隠蔽された歴史的背景を考えると無理からぬことである。「隠蔽」というのは、誰かが意図的にしたのではない。それは医療行政ひとり被告席に立たせて片付けられる問題では、決してなかった。これは私たちの現地活動の出発点でもあるから、もう一度この意味について確認しておきたい。

## 差別・偏見の体系

「らい(ハンセン病)」は若い世代の間では死語になりつつある。しかし古来から人間にとつて「病むこと」とは何なのか、これほど示唆を与えてくれた病気はなかった。なるほど、その時代によって人々の主要な関心となる病気がある。現在ではさしずめエイズである。単に死亡率や予防など、保健衛生上の問題に止まらず、誤解と恐怖がその文化的環境に應じ、一つの差別・偏見の体系を作るのは今も昔も変わらない。

ほんの十年前まで、らいは恐怖の対象として人々の間でささやかれていた。当時、日本にいた

患者は約九千名、全世界では一一五〇万人以上(WHO)とされ、さらに増えると言われていた。これは結核菌に似た「らい菌」によって起こされる感染症である。感染力は弱い、皮膚・眼・末梢神経をじわじわ蝕む。進行すると異様な顔貌となり、失明や手足の変形・脱落が起きてくる。しかも、命を落とすことは比較的まれで、崩れて行く肉体に耐えて生きざるを得ないところに悲劇があった。その恐怖の分だけ、らいの歴史は凄まじい歴史であった。

戦後、結核と同様、治療薬が導入されて治る病気となったにもかかわらず、この偏見はついに止むことがなかった。患者たちは相変わらず隔離された別世界に住んでいたし、そこで何が起きているかを知る者はほとんどなかった。一九九五年、やつと政府が重い腰を上げて「謝罪」したとき、患者は既に激減、その殆どが高齢化していて抗する元気もなかった。今でこそさまざまな形で告発ムードが流行したが、実際にこの世界にとびこんで患者たちと苦楽を共にする者が当時ごく僅かであった事実だけを述べておきたい。それくらい偏見の体系が強固であり、真綿で首を絞めるような



らい患者の診療をする中村医師

世間の圧力が実態として力を振るつたのである。  
**世界を支配する虚構**

一方、全世界的にも一つの虚構が支配している。一九八〇年代に一一五〇万人と発表された数は、一九九〇年代に二〇〇万人以下とされた。十年のうち患者が五分の一以下に激減し得るだろうか。ここに一例をあげよう。我々ペシャワール会のかかわるパキスタン北西辺境州とアフガニスタン



スタッフに講義中の中村医師

東部の地域で（人口約三千万）、現在七千名が登録されている。だが、らしい多発地帯は殆どが険しい山岳地帯の辺境で、足を踏み入れる者がいない。非常に控えめに見ても、推定二万人以上が未治療のまま放置されている。らしいは長期の定期服薬（二年以上）を要する。治療判定は時間をかけて慎重に行わねばならない。確かに登録された患者については、服薬で菌陰性となったものが多い。しかし、たとい感染しなくなっても後遺症の治療

が欠かせない。さらにペシャワール周辺だけで毎年新たに二百名の未治療患者が登録され、しかも女性患者は地区によっては十数パーセントの低率である。このような状態にもかかわらず、陰性患者の増加だけで「コントロール達成」が宣言され、登録された「感染例」の数だけがWHOに報告された。おそらく、この患者数の集計が「らしいの激減」という誤った印象を与えたものと思われる。

### 虚構への挑戦

この影響は大きく、治療センターを事実上失う事態にまで発展した。現在ですら七千名に及ぶ患者の合併症治療をどうするのか。窮した我々は一昨年社会福祉法人PLS（ペシャワールらいサービス）を現地に設立、民家を改造して急ごしらえの治療の場を何としても確保せざるを得なかったのである。それさえも、偏見からくる家主たちの立ち退き要求によって二年後までに移転を余儀なくされている。

「達成宣言」をする側はWHOと医療行政の評価を急ぐ。そうせねば財政援助に響く。現地政府もまた「らしい」が無くなることは国家的ステータスだから歓迎する。ここに現実と掛け離れた情報が見え、世界的に形成され、組織の延命策が事実を制する。これは他のアジア地域でも、他の疾病対策でも、大なり小なり同じであろう。前線の我々は心外である。

実態を暴露・告発して鬱憤を晴らし、当事者に打撃を与えることは困難ではない。しかし我々は、

患者たちに害が及ぶのを避け、ひたすら沈黙を守り、先の長い計画を営々と進めている。確かにハンセン病以外にも数多くの疾病がある。我々がこだわるのは、世界のほんの一隅でよいから、実事業を以て、巨大な虚構に挑戦する良心の健在を示すことである。万の偽りも一つの真実に敗れ去る。それが次世代への本当の遺産となることを信じている。



一九四六年福岡市生まれ。西南学院中学・福岡高校・九州大学医学部卒。一九八四年パキスタンのペシャワールに赴任。らしいの

コントロール計画を柱にしたアフガン難民の治療に携わりと共に一九八六年JAMS（日本アフガン・医療サービス）を設立、長期的展望に立ったアフガニスタン無医地区での診療モデルの創設をめざしつつ現在に至る。現在JAMSは一つの病院と四つの診療所を設置して、アフガン人の無料診療にあたっている。一九九四年十二月にはらい病院PLSを設立。著書に『ペシャワールにて』『ダラエ・ヌールへの道』（石風社）『アフガニスタンの診療所から』（筑摩書房）『ペシャワールからの報告』（河合文化研究所）がある。

## ●九六年度ペシャワール会総会報告

## 活動の着実な広がりに期待を寄せて

ペシャワール会事務局長 村上 優

九六年度ペシャワール会理事会・総会が七月二十日にPLS責任者ハンフリー・ピーター氏を迎えて開催されました。

## 一、理事会

中村先生による現地報告で始まりました。九六年度の第一の目標はPLS新病院の建築計画にあります。ハンフリー氏の尽力により州政府より借り受けた土地に二年をかけて、北西辺境州における名実ともにハンセン病治療センターとなる新病院を建設することです。期日を決められており、全力をかけて取り組まなければならない課題となりました。中村先生らの呼びかけに多くの募金も寄せられて、実現へ大きな一歩がしるされました。九六年度の予算は前年と同じ総額八六〇〇万円となりました。しかし収入の部では第一に急速に進む円安のために現地への送金に支障が出ていること、第二に国際ボランティア貯金からの配分金が減額されたこと、第三に新病院への募金が優先して普段の募金が減ったことで、予算より二〇パーセント減が予想されています。日本側として努力して募金活動を強化すると共に、JAMS

とPLSの現地とも協議して、一步後退となっても事業への継続を優先させることになりました。具体的には現地での活動を一〇パーセント減にすることで、同席されていたハンフリー氏も同意をしてくれました。これまで活動が前に進んでいる中で初めての事態ではありますが、苦勞を分け合うことで絆を深める機会にもなりました。

今回はペシャワール会名古屋支部をはじめ、関東連絡会や関西地区の方も参加していただきました。この着実な広がりに期待を寄せています。

## 二、総会

福岡市内の浜の町病院で開かれた総会では、ハンフリー氏の印象深い講演がありました。一五〇名程の参加者でしたが、いつも来ていただく会員のほかに、若い初めての参加者もみられました。毎年同じような活動報告だと言われる中村先生の話しですが、パキスタン北西辺境州からアフガニスタン東部にかけての地域を対象として診療活動の広がりが作られていることを見張ります。現地の苦勞、それを支えようとする日本との共同作業であることが、ハンフリー氏の話からもうか

がわれました。

## 三、ハンフリー氏同行記

七日目、ハンフリー氏は福岡に滞在され、香住丘教会や熊本での講演、記者会見、事務活動への参加など精力的にこなされてきました。本当に気さくで、やさしい方でした。パキスタンでは障害のある子供への教育活動もされており、子供への温かい視線が印象深く、阿蘇へ小旅行をした際に道端で子供が泣いているのを見て迷子になっていたのではと心配される姿に、日頃他人に無関心ですごしている私たちが気はずかしい思いでした。日本の支援体制を知っていたら、相互の理解が深まったことで、これから困難な時を共にすすす勇氣を得たようです。



ダラエビーチ診療所で診療をまつ人々

●各地区からの報告——九六年度現地活動報告会より

着実に  
育つてきた活動

ペシャワール会関東連絡会  
服部亮市

毎年恒例夏の報告会がやってきた。思えば四年前、会員拡大の指令(?)が「フクオカ本部」から出されて以来、トーキョーは関東連絡会を組織し毎年二―三回の現地報告会をおこなってきた。第一指令が出された四年前は、本部から送り込まれた辻睦雄特別工作員の訓練のもとに手探りで報告会の開催にこぎ着け、実践を重ねることにそのノウハウを習得してきた。やがて辻工作員はひそかに任地をはなれ第三国を経由してフクオカに帰着したが、彼の珍しい種は着実に育ってきた。

工夫をかさねて

トーキョーで彼に十分実地訓練をされた分子たちは、やがてあらゆる事態にも対応できる知識と体力を身につけた一人前のメンバー(なぜか

女性が多い。男子隊員募集!)として育ち、今や毎年夏と冬の現地報告会は、どのような工夫と成果をあげるべきかという定例の演習の場とも言えよう。

今夏の現地報告会には、中村哲先生に加え素晴らしい賓客をお一人迎えることができた。現地ペシャワールのPLS責任者兼事務長である、ハンフリー・ピーター氏である。三年前ペシャワール会十周年を記念してJAMS院長のシャワリ先生を日本に迎えた時、私たちはまだ熟練したメンバーではなく外部への周知が十分ではなかった。すなわち多くの会員の参加を得ることはできなかったが、会員でない初めての人への呼び掛けが十分でなかった気がする。しかしこの時は、会員のなかにこうした行事の際に非常に協力的で強力な助っ人となる人達と知り合うことができ、現在につながっている。まず内部固めという点で大きな成果をあげることができたのである。

「まずまずの成功」

今回ハンフリー・ピーターさんをお迎えするにあたっては、会場をい

つもと違ってもっと一般の人々がアクセスしやすい場所とすること、会員以外の人々への呼び掛けにも何とか工夫をしたいということについて重点をおくこととした。そういう意味で、会場を若者の町、渋谷にある勤労福祉会館を選んだこと、新聞と雑誌を通じて一般の人達の参加を呼び掛けたことにより、一般の参加者は会員数を上回った。「まずまずの成功」と、八月の例会は、早速暑気払いとなった。

チャリティーコンサート計画中

もちろんただ飲んでるだけではありませぬぞ!! その日には十二月に我々主催のチャリティーコンサートを開催することを決めた。新たな戸挑戦である。会員である音楽家の戸

田さんの呼びかけにより現在着々と準備をしている。アフガニスタン・パキスタン両大使館のご協力による両国の歌もまじえて、中村先生のお話と音楽の夕べを企画している。

関東地域にお住まいの方!是非ご参加下さい。準備作業と一緒にしていただける方も募集しています。関東連絡会では年齢や職種を越えて楽しい会話が弾んでいます。どうか一人でも多くのメンバーの参加を待っています!

最後に七月二十八日の報告会会場の片隅にあつた募金箱に総額七四四、三三三円のご寄付がありました。人知れずご寄付いただいた方々にこの紙面をお借りして深く深く感謝致します。

来る12月5日、関東連絡会主催のコンサートを開きます。コンサートのすべては新病院の建設費用に使われます。関東地区の会員の皆様参加をお願い致します。

チャリティーコンサート  
ペシャワールのクリスマス

とき 1996年12月5日(木)午後7時  
ところ ティアラこうとう(旧江東公会堂) B1大会議室  
地下鉄都営新宿線「住吉」下車  
徒歩4分 (03-3635-5500)

チケット 2500円(全席自由)  
申し込み・問合せ  
ペシャワール会関東連絡会  
TEL/FAX 045-716-0117(服部方)  
戸田志香 TEL 0474-72-9706  
※郵便振替での申込みもできます。  
口座番号 00150-0-400815  
名義 ペシャワール会関東連絡会

プログラム 中村医師による活動報告(予定)、ならびにキスタン・アフガニスタンの歌曲演奏

※5時45分より現地活動のようすを収めたビデオの上映をします。



名古屋で病院建設をアピールするハンフリー氏

「現地主義」  
を支えるために

ペシャワール会名古屋支部

八木 巖

「縁によって」

ペシャワール会名古屋支部も一月二十八日の結成より半年過ぎました。正直に言えば、一部の方々を別にすれば、多くの者はこれまでペシャ

ワール会とのつきあいはあまりなく、中村先生の言葉を借りれば、「縁」によって参加した者が多数です。もちろん名古屋支部結成前より会員になつておられる方もあるし、サウスライオンズクラブのように積極的に関わつてこられた人もあります。しかし私を含めて多くのものは支部結成を前後して関わりをもち始めました。

その名古屋支部が七月二十七日に、中村先生とハンフリーさんをお招きして、中区栄の教育会館で現地報告集会をもちました。参加者は会員を中心に七十名ほどでした。お二人には事前に河合塾、東海郵政局、サウスライオンズクラブを訪問していただき、とてもハードな日程でした。大変お疲れさまでした。

### 圧倒される風景

集会では中村先生のスライドを使った現地報告で始まりました。これまでも名古屋支部では中村先生に二度お話しをしていただいています。スライドによるものは初めてでした。中村先生は淡々とお話しをすすめられました。けしのお花畑(！)の話、内戦のこと、厳しい自然状況、などなど。それはカルチャーショックで

もあり、困難というにはあまりに圧倒される風景でした。中村先生が、なんとしてでもやり遂げなければならぬ仕事だとの決意を述べられたとき、これは本当に大変なことであることが実感されました。

ハンフリーさんはしっかりとした方で、「紳士」という印象でした。沢田さんの通訳を介して、これまでの現地での困難の解決にむけた具体的な行動を報告していただき、未来へむけた希望を語っていただきました。とても大事なお客様に名古屋に来ていただいたと思っています。中村先生、ハンフリーさん、それに沢田さん、本当にありがとうございます。

集会の様子はNHKのニュースでも紹介放映されました。

名古屋支部はこれまで名古屋のNGO団体の集まりに参加し、活動紹介をおこなってきました。ミーデーでの企画、NGO団体の地域的な集まりの催し参加、八月には三重県津市の集会へ、九月十五日には愛知県小牧市へと出向いています。これまではどちらかといえば紹介宣伝の活動を多くしてきました。マスコミの方々の協力もうけてきました。

今、名古屋支部の事務局のなかで



手術後スタッフと会話する中村医師

話し合っていることは、支部会員に目を向けた仕事についてです。情報提供や活動報告、意見交流、ボランティア精神の枠内での会計確立。集会の打ち上げの際に出た意見は、「とりあえずだれか現地へ代表が行かなあかんあ」ということでした。よい意味での「現地主義」を支えるために、現地の人たちとどうつながっていくかを模索中です。

### 現地の励み となる活動を

八尾ペシャワール会

蔵所麻里子

去る八月二〜四日の三日間、関西にて講演会が行われました。今年は例年の八尾、京都に加え、大阪府松原市においても行われ、連日のことで中村先生にはお疲れさまでした。

いずれも約三〇〜四〇名の方がお越しになりましたが、例年通り初めて中村先生の話をお聞かせられた方が半数以上を占め、主催者側としてはとてもうれしく思っています。ただ、主催者側の連携がもう少しうまくいけば、準備や当日の運営も改善されるのではないかとこの点がいくつかありました。今後回を重ねながら、来て頂いた方にご迷惑をおかけしないようにしていきたいと思えます。また、先日総会の際に思ったのですが、現在東京、名古屋支部が発足し各々独自の活動を展開していますがお互いの活動が参考になることもあると思いますので、もっと連絡をとりあってみてはどうでしょう。

私も現地にいて何ができるかわかりませんが、日本での横のつながりを広げるような活動は、現地の励みにもなるのではないかなと思います。皆さん、御一考を。

話が横道に逸れてしまいました。講演会ですが、中村先生のお話は金太郎爺のようによいお話ではないかというところが、今回の発見でした。悪性マリアが流行した際の緊迫した状況、殉死したスタッフもいたというお話には、背中がぞくぞくとしました。亡くなられた方やご家族のことを思い、平和のうちに活動が進められることを心から願います。

\* 関西で行われました講演会の際にとりましたアンケート(抜粋)をまとめました。

・ 現地と日本との大きな差を思い、大きな働きに感謝いたします。(54歳、男性)

・ 認識を新たに、感動しました。健闘を怠りません。(60歳、男性)

・ 日本内地の派手に遊ぶことが第一のような世の中ですのに、中村先生始めスタッフの皆様のご苦勞の内いられますことを、もったいないとしみじみ申し訳なく存じます。ど

うぞお体に気をつけられまして、世界のためにお働きくださいことだけを祈っています。(81歳、女性)

・ 私たちは大変「しあわせ」ですね。本日は大変ありがとうございました。(52歳、女性)

・ この夏休みは初めて医療ボランティアへの参加が始まりますが、先生のようにおだやかで楽しく仕事ができればと思います。(29歳、女性)

・ とても立派な事だと思いますが、とても一人ではできない事だし、同じ思いをした人達が集まったことが不思議です。思うのは皆思うと思いますが、とても自分がーとは思いますが、私達も50年前はたぶんこうだったと思いますが、今は幸せです。そして自由です。そうなる、つらい、苦しい事は見ないようになっています。今は複雑です。人ごとのような、そうでないような。(52歳、女性)

・ らいという名前の病気があるなんて全然知らなかった。らいにかかるとかからないためにはどうすればよいかという予防活動が大切だと先生がおっしゃった時に、なるほどって思った。ペシャワールの人達は病院へ行きたくてもそこへ行くお金がな

くて死んでしまう人がいると聞いて、私達は幸せだと思ったし、少しでも何か小さなことでも役に立てたらいなと今日はいろいろ考えさせられた。すごい勉強になった。(19歳、女性)

・ 今までアフリカの難民とか、病気がかかるとか医療が行きとどかず困っているというのはテレビや新聞などで耳にするけど、細かいことや本場の状況みたいなのがあまり伝わってこなかったけど、今回この講座に出てみただけ大変なのか、またどういった経過を経て今の状況になったのかというのがよくわかった。らいという名の病気も初めて聞きました。(18歳、女性)

・ 今回の講座においてハンセン病の実態とアフガン侵攻及び撤退の状況がよく理解できました。メディア等の情報と違い、現地で活動生活をしてる先生の話には真実味があり大変勉強になりました。(20歳、男性)

◆未使用の切手・ハガキを！◆  
\*会報の発送費に、年間百万円以上がかかっています。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。  
(古切手は扱っておりません)

## ●ワーカー通信

やつと相手のことを  
考えるようになった

PLS作業療法士 蔵所麻里子

## 圧迫感

七年前に初めてペシャワールへ行った時は、自分が何かをするというより、病院を見に行っただけだったんだなあとこの頃思っています。別に周りからは何も期待されていないかも知れないけれど、何もできない自分、何もしていない自分を周りの人はどう見ているだろうということを、今回はいつも気にしていたような気がするからです。前回はそのような圧迫感はありませんでした。

七年前、もうすぐ日本へ帰るといふ日のある夜、私を含む三人の日本人とパキスタン人の女性とで話をしていました。何について話していたのか忘れてしまいましたが、ある言葉の意味について、英語で話すことができる三人は議論していました。私は三週間滞在している間に、何を話しているかくらいは聞き取ることができるようになっていました。が、議論には加わることができずにいました。でも三人とは異なる意見を持っていたので、それ

を通訳してもらおうとそのパキスタン人の女性は大変驚いて「マリコも英語で話すか賢いじゃない!」と言いました。彼女の口が悪いことは分かっていたのですが、この言葉は非常にショックでした。私は馬鹿だと思われていたんだ、英語さえ話せたらと思ひ、いつかまたペシャワールへ行く日のためにと、英会話の勉強を始めました。

自分の考えくらは伝えられるようになって今回は、ウルドゥ語が分からない私にとって英語が唯一の表現手段です。ところがある日サイド先生と話をしていると、先生が「英語でばかり話しているとウルドゥ語が覚えられないから、ウルドゥ語で話をするようにしなさい」と言われました。英語で会話ができていることにうれいような、悲しいような。そしてこの時、英語さえできたらと思っただけは間違いだったんだと気づいたのでした。

それからしばらくは力が抜けてしまいました。毎日中村先生やビルキー先生が教えて下さっているといても、病院で使うようにとアドバイスされても、なかなかそうはいきません。早く仕事を覚えようと毎日倉松さんと行動を共にしていると、何故いつも一緒にいるのか、まるでひよこみたいだからかわれもします。背が低いこともあったのか、子供扱いされます。つい私は十一年間日本の病院で仕事をしてきたんだと言ってしまうんだと聞かれます。子供だと思っていたら、自分

よりもずっと年上だと知り驚いている相手の顔を見て、仕返しをしたような気になっている自分を振り返ってみて今、醜いなあ、恥ずかしいなあと思えます。

## 意味のない自信

日本では、周囲の人達から技術や知識や性格を認められ、それを基盤に人間関係を築いていたのだと知りました。基盤がない今、どのようなスタンスで周囲の人とつき合っていけばいいのか分からなくなり、暑さや慣れない環境もあって、一カ月程混乱していました。自分に自信がなくなり、今の自分を客観的に見て、落ち着いて考えることができなくなりました。今思えばそんな時に、自分に自信を取り戻そうと自分にはこんな技術があるんだとか、こんな実績があるんだということを見せつけるようなことをしたくなるのでしょうか。でもそんなものはここでは役に立たないし、意味がないのです。そしてそうすることでさらに周囲の人達との関係をますますくわしくしていたに違いありません。

## コミュニケーションを繰り返して

現地の言葉が話すことができるということは、確かに重要なことで、間違っても使って話をしようとする努力していれば、いつも助けてくれます。最近少し話せるようになったねと一緒に喜んでくれます。でもそれは言葉が話せるということに対してではなくて、何とか周りの人達とコミュニケーションを図りたい、お互いを理解し合いたい

という気持ちに対するもので、それを繰り返して新しい人間関係が築かれていくのだと思いました。混乱していたときは、物事についてじっくり考えるとか、解決策を見いだすために模索するといったことが全くできず、精神活動が停止したような気分でした。そんなときに、ある書物に「自信とは、自分を信じることだ」という文章を見つけました。知識や経験や技術は身につけても、また失われたり場所を変えれば役立たなかつたり、有害だつたりするけれど、今まで何度もしんどい状況にぶつかつても、諦めずに越えてきた自分の力を信じることはできると思つたときに、やつと少し落ち着いて自分を振り返ることができるようになりました。もう一つ、ある書評の言葉にも励まされました。「ある時期、人は世の中から「オマエは無力だ」ということを嫌というほど思い知らされる。そこで、大半の人たちは何かをあきらめてしまう。だが大切なことは、逆に無力だと自覚することだ。そして、「無力」だと思つても、「無能」だと思つてはいけないということだ。」

入れ替わり立ち代わりやつてくる日本人ワーカーに、事あるごとに皆は傷つけられているのかも知れないと、やつと相手の事を思えるようになったのは、日本に帰ってきてからでした。今度また出かけたときに、同じ失敗をしないように、周りが見えなくなつたときに読み返せるようにと思つて、書きました。

(一九九六・八・一)

山を越え川を渡つて  
フィールドワーク(-)

PLS看護婦 藤田千代子

カイライト(雨乞い)のこと

ベシヤワール会のみなさん、お元気ですか。今日は金曜日でユニバーシティタウンのスタッフハウス周辺も大変静かで、休日出勤のヌールベガムを送り出して、ひさしぶりにのんびりした気持ちになつています

ベシヤワールは数日、五十度近くあるんじゃないかと感じるくらい暑い日が続いていたかと思うと一日か、または数時間、雲で空がおおわれて少し涼しくなります。

ちよつと前、二週間も暑い日照りが続いた時は所々の地区で、カイライトといつて誰かがその地区の全家庭に食事をだし、みんなで神に祈ることがはじまっています。一種の雨乞いでしょうか。私たちの病院のドライバーの一人が住む地区で、カイライトがあつたその日の昼過ぎから雲が出てきて、夕方には待ちに待った雨が雷とともにやってきたのです。患者もスタッフも病院周辺の人達も雨宿りをする人はいません。皆、嬉しさのあまり雨にうたれながら両手と顔を空に向けて感謝の祈りをしたり、抱き合つたり、足底潰瘍で足に包



薬局で薬の買い付けをする藤田看護婦

帯を巻いている患者たちも雨の中で踊りださんばかり。でもだれがこの患者たちに注意できるでしょうか。スタッフも皆白衣のままです。濡れになつて喜んでいたのですから。

祈りをしていた人達は心からアッラーアクバル、アッラーアクバル(神は偉大なり)と何回も叫ぶだことでしょう。

要領が悪くても自分たちで準備

七月三十一日にラシュツツから診療チームが帰ってきました。二回目の診療でJAMSのアーベツトを交えての現地のスタッフだけのチームです。一回目はチトラルへ入るロワライ峠の雪がとけて雪渓が切り開かれ通行可能になるのを待つて、六月初めから約二週間の用意で中村医師、アーベ



マストジ村へ向う途中で

ット（JAMS看護師）、アミール（JAMSカメラン兼食事係）、ヒダーヤット（JAMSレプロシテクニシャン）、ムサーベツグ（マストジのスタッフハウス、チョコキダール・食事係）、ナジブラー（PLS検査技師）、ヨルマスディン（JAMS看護師アシスタント、トレーニング中）、アミールディン（JAMS看護師アシスタント、トレーニング中）、私―藤田（看護婦）でチームを組んで行ってきました。

トレーニング中のヨルマスディンはラシュツ、アミールディンはマストジからきた男の子です。ふたりは昨年の十一月ペシャワールへ来てスタッフハウスに住みトレーニングをうけています。自分の村で診療ということで大変なはりきりようでした。

PLSとしては医者、看護婦、レプロシテクニシャン、検査技師とチームをつくり初めての本格的なフィールドの診療です。医薬品、検査道具

食料品などを手分けして準備開始です。昨年はこちらの準備にはフィールドに慣れているJAMSのスタッフに応援をたのんで一緒にやっていたのですが、今年は準備は自分たちでやってみようと思ひ、それぞれ係りを決めました。なるべく手はださないようにして彼らがどうやっていくのかを見るのはとても忍耐のいることです。当たり前のことですが、いくら要領が悪く、いくら時間がかかっても自分たちでやってみなければわからないのです。彼らも、私も。

半月ほど前から薬品整理の仕事を任されたトレーニング中のスタッフは、薬屋から配達された薬品のチェックや、病棟、外来への薬品だしにしておかれて（まだ慣れていないので時間がかかる）いる最中でのラシュツ行きの薬品準備だったので、頭はもう一杯だったはず。それでも自分がやりたいと意思表示するのでもかせることにしました。なんとか、それぞれの準備が整って、六月五日ペシャワールをたち、マストジで一泊し、早朝にラシュツへ向けて出発しました。

### 馬に乗ってラシュツへ

車で行ける最終地シャウコウチで打ち合わせせどおり、馬七頭を準備し、ヨルマスディンが待っていました。荷物を馬に積むとき、あまりの多さに馬主が話がいぶん違ふと怒りだしたので、持ちきれない薬品をドライバリーにマストジまで持って帰るように言うと、ヨルマスディンが自分が持つからと頑張るのです。彼としては自分の村へ少しでも多くの薬を持って行きたかったのです。そんな彼の気持ちと同じ北部出身の馬主たちにも伝わって、結局一つも残すことなく運べました。

山を越え、川を渡り、約十一時間後目的地に着。馬が足りず歩きっぱなしだった検査技師は着いたとたん、ダウン。彼の運動靴は底の薄い布を残し全部はげ落ちていました。もう一人の靴は一か月前に買ったばかりだったのが真ん中から割れていました。

中村先生やJAMSのスタッフは慣れしているせいか、とても元気にみえます。私は初めての馬の旅で太腿の内側が痛くてまっすぐ歩けない状態。そう言えば昨年、中村先生が夏に日本に帰ったら馬に乗る練習をしかんねと言われた事を思い出しました。

初めから終りまで検査の顕微鏡を背中におぶってスタスタと歩いているムサベクを見て、よくこるげ落ちずにラシュツについたなあと感じさせられます。

翌日は診療のための準備にとりかかりました。

外来診療と検査は野外、投薬所はヨルマスディンの家のゲストルーム（スタッフが寝起きに使わせてもらっている部屋）待合所はそこらへんの畑や土手と、自然に決まっていきました。JAMSのアーベットとトレーニング中の二人が薬品の準備、診療場所の設定などを進めていきます。アーベットはファルシー（ペルシャ語）をしゃべりあとの二人はコワリー語やウルドゥー語をしゃべり、それでもスムーズに仕事が進んでいる様子でした。その次の日から診療開始です。村の人達はコワリー語という言葉が話すのでヨルマスディン、ア



フィールドワーク（巡回診療）へ向う

ミールディンが交互に診療所で通訳をします。この日は夕食後、それぞれの持ち場で必要な言葉を各自が教わり、皆、ブツブツブツブツと小声で練習しました。二日目からは朝八時に朝礼を行って昨年の診療状況をざっと読み上げ、気づいたことなどを一つ二つ。四方を雪の残る高い山に囲まれたほんのわずかな平野に、こうして立って朝礼をしていると、ここにいることがとても不思議に思えてきました。

女性たちの姿に生活の大変さがうかがわれる

一週間の診療で、貧血、トラコーマ、回虫症、腰痛症、てんかん、結核、らい、心臓疾患、リウマチ、いろいろな人達が受診しました。中でも女性たちの貧血、腰痛、腕、足、背部、膝痛の多

いこと。でも彼女たちの日に焼けた顔、男性の手と見まちがえるようなごわごわした大きな手、やせた体を見ると、山での生活がいかに大変かが少しはうかがえます。また、高地のため、野菜、果物がないのだそうです。そういえばマストツジにあるような桑の実やクルミ、アンズ、ブドウなどの木を見かけなかったし、私たちがペシャワールから持っていったトマトや玉葱を使い果たしたとき、食事係の人が野菜を手にいれようとしたがだめだったそうです。玉葱が少しは作れるが自分たちの家族分にも不足すること。ついでですが木も育たないようでとても少ないのです。切り倒して少ないというより、大木にならないようです。でも、薪で生活しているから切り倒している量も多いのかもしれないですね。ヤルクン川の対岸の村も岩影にある家は別にして、何軒家があるかすぐ数えられるのです。

話は受診した村人たちのことに戻りますが、若い女性が診療を受け、てんかんと診断されました。先生が家族に説明をするのでここへ呼ぶように言われると彼女は一人で来たと言います。若い女性にはかならず父親または兄弟、夫の誰かが付き添ってくるはずなので珍しいと思っていたら、彼女が涙をうかべて話すには、結婚していたが、時々気が失って倒れるため、恐ろしがられて離婚されたとのこと。幸い一種類だけはてんかんの薬を持って行っていたので先生が説明され、最後にコワリー語で「ジャムボーイ（良くなりませよ）」と言われたとき、彼女の目から涙がこぼれ落ちました。

てんかんと診断さえついて、薬さえ手に入れば（ペシャワールでは今回処方した薬はとて安く手に入る）、でもここから、女性がどうやって…と考えると気が遠くなります。

らいの患者とその家族もきていました。登録され服薬中の患者、服薬を途中でやめていた患者、ほかにも家族を連れてきて待っていた患者がいましたが、少しの間待ってもらっている間にスツと姿を消してしまいました。

後でわかったことですが、年に一回か二回ほどマストツジから、らい診療員が与薬と家族の検査に村に来るらしいのです。彼の名前と職業を皆知っており、彼が入っていった家にはらいの患者がいるのだと皆に知れてしまうので、家族の検査を拒否したり、皆、彼に来られるのを恐れているということ。らい診療員が帰っていった後、村人がその家族に対してどうなのかは想像が付きません。ペシャワールでもクナルの村でも、村人たちに、もうあなたのところとは一緒にお茶は飲まないとか、村から出ていってくれと言われて困っている患者家族がいくつもあるからです。今回の診療でこういう状態がわかったことはこれから先のPLSの仕事のやり方を決めていく上でとてもよかったと思います。

また、ラシュツで定期診療をしていくとき、私たちのチームがペシャワールの病院で患者たちに接しているように普通に接していくことで村人たちの受けとめかたが少しづつ変化していったらいのになあと思っています。

●事務局だより

\*ハンセン病院建設資金のほぼ半分の約二五〇〇万円が集まりました。会員の方々の病院建設への理解を強く感じ、その熱意に対して深く感謝致します。

今回の総会には、PLSの責任者であるハンフリー氏に来ていただき、福岡・熊本・名古屋・東京で病院建設をアピールしていただきました。マスコミ等での反響も意味のあることでしたが、何よりも氏がPLSを支えているのは、日本のごく普通の人々であることを実感してくれたことが重要なことかと思えます。彼の「小さくとも美しい活動を、末永く継続してほしい」というメッセージを心に刻みたいと思います。

\*新聞報道でご存じのように、タリバーン(原理主義)のカーブル奪取によってアフガン情勢が新しい局面を迎えました。今後の展開は予測しがたいですが、いかなる局面においても「政治権力」とは無縁な所で、私たちの活動が続けられていくことだけは間違いないことだと言えます。アフガニスタンに真の平和の訪れることを祈念せずにはおれません。

\*前号でもお伝えしたように、ボランティア貯金の

補助金減額や円安により、通常の現地活動費がピンチです。新会員の紹介等さらなるご支援をお願い致します。

●ペシャワール会ハンセン病院建設基金 郵便振替 〇一七三〇一九一三二四二一

◎村から

「ここじゃなか婆」という水俣病の患者さんの言葉を聞いたことがあります。私達の住む世間以外のもう一つの世間という意味です。またあるテレビ番組で、白内障の娘を連れて母親が夜通し歩いてどこかの外国のNGOの医者を訪ねたが、治療の余地がなく、ふたたび手を引いて帰路につく様子が映し出されていました。私達の住む世界には不条理としかいいようのない事情で苦しむ人達があり、ペシャワールやアフガンの人達もまたそのようです。私は中村先生を初めとする現地スタッフの皆さんの活動はおろか、会の活動にも殆ど貢献する術を持ちませんが、できることを少しずつ、と思っています。

ダラエ・ヌールへの道

—アフガン難民とともに

中村哲 四六判上製三二六頁 定価二〇六〇円  
ひとりの日本人医師が、現地との軋轢、日本人ボランティアの挫折、自らの内面の検証等、血の噴き出す苦闘を通して、ニッポンとは何か、「国際化」とは何かを根底的に問い直す渾身のメッセージ

石風社

福岡市中央区大手門一八八  
電話 〇九二(七一四)四八三八

ペシャワールにて [増補版]

中村哲 四六判上製二六〇頁 定価一八五四円  
石風社 福岡市中央区大手門一八八  
電話 〇九二(七一四)四八三八

アフガニスタンの診療所から

中村哲 B6判並製二〇〇頁 定価一〇〇〇円  
筑摩書房 東京都台東区蔵前二一六四  
電話 〇三(五六八七)二六七〇

会 則

- ①本会の名称をペシャワール会とする。
- ②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④会員は一口年額三、〇〇〇円以上、学生会員一口一、〇〇〇円以上、特別会員一口一〇、〇〇〇円以上の年会費を納入する。
- ⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧役員の改選は毎年総会にて行う。
- ⑨毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑩本会の事務局をFARA HOUSE (〒八一〇 福岡市中央区大名一丁目一〇 二五上村第二ビル三〇七号 ☎七三二一二三七二) 内におく。